

平成24年度 大学生の力を活用した集落復興支援調査 報告書

みんなが参加して新しい鮫川村をつくりましょう

・・・集落点検・地域活性化ワークショップを通して・・・



2013年3月

宇都宮大学農学部農業経済学科守友ゼミナール

目次

I はじめに

- 1 豊かさとは何か、元気な地域を作っていく視点
- 2 農山村の抱える四つの空洞化と地域再生のための四つの柱
- 3 四つの柱の内容
- 4 参加の場づくりの具体化
- 5 地元学とは何か
- 6 集落点検ワークショップ
- 7 地域活性化ワークショップ

II 館山周辺（鮫川村中心地北部）

- 1 集落点検ワークショップ
- 2 地域活性化ワークショップ

III 広畑（鮫川村中心地南部）

- 1 集落点検ワークショップ
- 2 地域活性化ワークショップ

IV おわりに



I はじめに

1 豊かさとは何か、元気な地域を作っていく視点

いま豊かさとは何か、元気な地域を作っていくにはどのような視点が必要かということが問われている。近年それに対して三つの側面からの検討がなされている。

第一は経済学からの考え方であり、人間のもつ潜在能力の発揮という側面である。

第二は経済学から政治学への拡がりの中で論じられていることであり、そこでは参加の重要性が言われている。

第三は社会関係資本の考え方から議論されていることであり、信頼、協力、参加、義務の重要性が論じられている。

第一の考え方から見ていく。ノーベル経済学賞を受賞したインド出身の経済学者アマルティア・センは、人間は年齢、性別、医学的条件（健康か病気か）、家族や社会における立場などの違いがあることを議論の出発の前提としている。そこで考えなければならないのは、みな違う人間に共通する豊かさや福祉の向上をはかる指標は何なのだろうかということである。結論から言えば、差がある中でそれぞれのひとが持っている、潜在能力（ケイパビリティ）の発揮、潜在能力を発揮するための選択の自由、選択のための機会と条件の整備が大切であると述べている。

第二の考え方は、数学を駆使する計量経済学者ブルーノ・S・フライとアロイス・スタッツァーによるものである。個人の幸福度と一人当たりの国民所得、失業率、インフレ率などは相関関係があるのだろうかと考え、大量統計調査を行った。そこから導き出されたのは、それらは無関係ではないが統計的には有意ではないということであった。では幸福度は一体何に関係があるのであろうか。そこでさらに分析を進めて政治的な側面にまで視野を広げ、次の様な結論を導き出した。人々が公的な意志決定に直接参加する可能性が増せば、幸福の増大に大きく寄与する。つまり幸福と参加との相関関係を統計的に見いだして、参加の重要性を指摘したのである。

第三の考え方は哲学者ロバート・パットナムによるものである。彼は住民が様々な分野で活発に活動し、平等な政治が行われている地域を調査分析し、そのような地域では、相互信頼、社会的協力、市民的義務感が絡み合いつつ、社会的効率性を高めていることを見いだした。そこから地域の活性化には、相互信頼、協力、参加、義務の大切さなどが重要であることを提起した。

2 農山村の抱える四つの空洞化と地域再生のための四つの柱

近年農山村の抱える問題として四つの空洞化が指摘されている。

第一は人の空洞化である。過疎化の進行で、人口は社会減から自然減へと移りつつある。

第二は土地の空洞化である。人口が減少する中、親世代が高齢化し、次第に引退するようになると、農林地を管理する主体が不足し、農林地の荒廃化が生じてくる。

第三はムラの空洞化である。人、土地が空洞化してくると、寄り合いが少なくなり、集落活動が停滞し、ムラの活力が減退、喪失してくる。

第四は誇りの空洞化である。こうした人、土地、ムラの空洞化が進む中で、しかも都市的価値観が広がる中で、農山村で生きる誇りが失われる危険性が生じてくる。

ではそういう中で農山村、地域再生のためには何が必要であろうか。ここでは四つの柱を提起する。

第一の柱は「場」、つまり参加の場づくり、住民総参加の道の追求である。

第二の柱は「主体」、つまり暮らしのものさしづくり、地域に生きる誇りや価値観の再構築である。

第三の柱は「条件」、つまり内発的なアイデアの形成による、お金と循環づくり、つながりづくりである。

第四の柱は「時間」、つまり活動の柔軟な継続、持続性の構築である。

3 四つの柱の内容

四つの柱をもう少し詳しく見てみよう。

第一の柱は参加の場づくりであるが、参加型の地域づくりとして、地元学があげられる。これには東西の二つの源流がある。一つは西の熊本県水俣市から始まった実践であり、公害の中から地域の再生をめざすなかで編み出されたものである。地元にあるものを探し、新しく組み合わせたりして、そこからまちやむらの元気をつくり出していこうというものである。もう一つは東の東北地方の実践から生みだされたものである。ないものねだりをするのではなく、あるもの探し、あるもの活かしへと視点を変えて、地域の再生をめざそうというものである。(後に少し詳しく説明する)

第二の柱は暮らしのものさしづくりであるが、この中で大切なのは地域の文化の再評価である。例えば現在全国に広まりつつある、「食の文化祭」などは、食文化の再評価と地域の誇りを足元から見いだす活動であり、自給畑の評価を含めて展開しつつある良い例である。

第三の柱は内発的なアイデアの形成によるお金と循環づくり、つながりづくりである。地域の文化、資源、福祉などに付加価値をつけ、地域活性化の基礎づくりとなるものである。例えば①農林業の多角化、複合化としての1次×2次×3次=6次産業化、②環境、

交流、経済のつながりとして、中山間地域等直接支払制度、オーナー制、CSA（地域・コミュニティが支える農業）、③有縁の社会づくり、すなわち新潟県上越市のNPO かみえちご山里ファン倶楽部が展開する「有縁の米」・・・不作時の消費者への分配、子供の学びの場の提供、地域行事への参加、移住相談、災害疎開などを総合的に提起して、都市と農村のつながりをつくり出そうとしている活動などである。有名になってきた宮城県の鳴子の米プロジェクトもこうした動きの中に入るであろう。

第四の柱は活動の柔軟な継続、持続性の構築であるが、この点ではむらの伝統文化の継承の仕方から学ぶことが多いといえる。例えば鹿児島県阿久根市の「脇本山田楽」は関ヶ原の戦いの時、島津勢の出陣の檄であった。時代を経て継承されてきたが、近年それが難しくなってきた。そこでこれを学校教育の中へ取り込み、薩摩の「郷中教育」＝後輩は先輩を敬い先輩は後輩の面倒を見るというやり方を活かし、小学5年生を対象に6年生が教え、次の年は繰り上がった6年生が次の5年生へ教えるというしくみを作りあげ、継承を行っている。愛知県の東栄町の花祭りは、長男一子相伝であったが、少子化し維持が困難になる中、交流する都市住民も踊りの担い手として継承をはかっている。このようにむらの伝統文化の継承の中にある、組織体制、分担と責任、そこから地域を元気にしていく工夫、方法を学んでいくことの大切である。

4 参加の場づくりの具体化

参加の場づくりという点で、まず都市における参加型のまちづくりはどのような流れであったのか見ていこう。図示したように川喜田二郎のKJ法の活用、ヘンリー・サノフによる環境デザインワークショップなどの手法が導入され、日本国内では、東京の世田谷まちづくりセンターがこの手法を積極的に導入し広めていった。

・・・都市のまちづくりの流れ・・・

一般的な考え方

川喜田二郎『発想法』（1967年） KJ法

様々な意見をカードに書き出して整理し体系化する
都市におけるまちづくりの考え方

ヘンリー・サノフ『まちづくりゲーム』

（1993年翻訳）

環境デザインワークショップの始まり

世田谷まちづくりセンター

『参加のデザイン道具箱』（1993年）

日本でワークショップを広める

農村における参加型のむらづくりは、次に示すように、その手法は、はじめは試験研究機関により開発され、それが地方行政では、静岡県をはじめとして、農村整備、農村計画の分野から次第に広がってきた。

・・・農村のむらづくり・・・

東北農業試験場

『戦略的村づくり支援システムTN法』

（1992年）

地域活性化のための住民の意思決定を支援する手法

農村開発企画委員会

『村づくりワークショップのすすめ』

（1994年）

集落環境点検ワークショップのはじまり

静岡県農政部『Field Work Book』

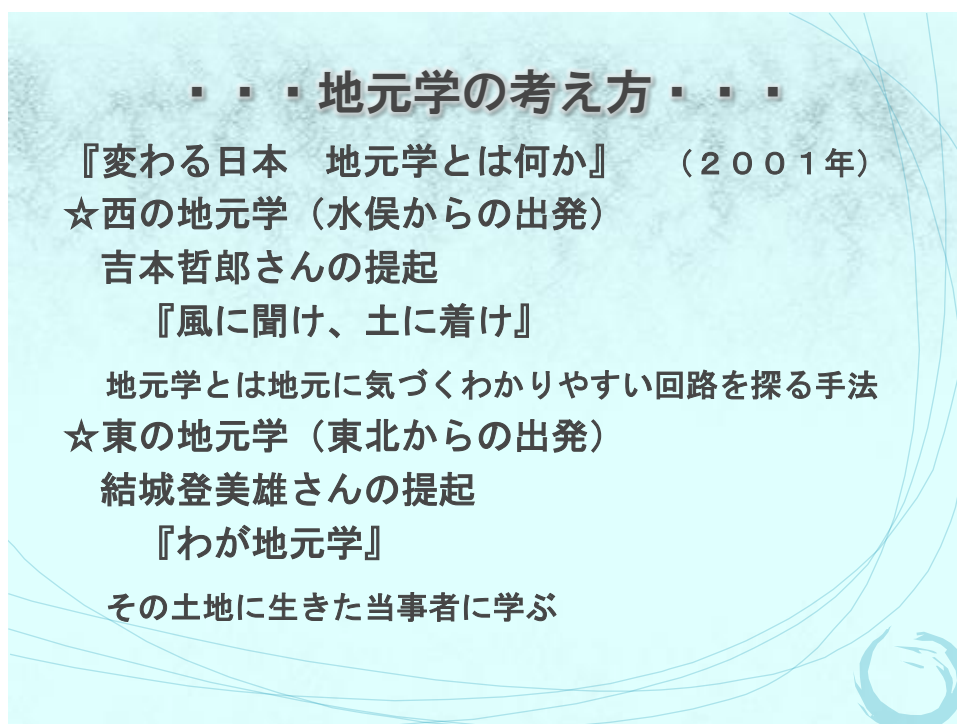
（1995年）

地方自治体が初めてつくった手引きパンフレット

5 地元学とは何か

足もとからの参加型地域づくりということでは地元学の考え方やその方法を学ぶことが大切である。

地元学には大きく分けて西と東、すなわち熊本県水俣市と東北地方という二つの源流がある。



まず西の地元学から見ていこう。提唱者で元水俣市役所の職員であった吉本哲郎氏は、図示したように地元学を説明している。

．．．西の地元学．．．

吉本哲郎『風に聞け、土に着け』

『地元学をはじめよう』（2008年）

◎地元学は、地元にあるものを探し、新しく組み合わせたりして、町や村の元気をつくっていきます。

◎地元学は、住んでいる地域にあるものを見つめることから始まります。「ゆっくり」と集落を歩いて、急がず、あせらず、「じっくり」と家のまわりや集落にあるものを、徹底的に探していきます。

◎いい地域の条件

環境（豊かな自然がある）、産業（いい仕事がある）、生活文化（いい習慣、住んでいて気持ちがいい、生活技術を学ぶ場がある、三人の友達がいる）

自然と生産と暮らしがつながり、新しいものをつくり出す力を持っている

次に東の地元学について見ていこう。提唱者である民俗研究家の結城登美雄氏は。多くのむらを歩きながら、図示したような地元学の考え方をくりあげてきた。

．．．東の地元学．．．

結城登美雄『わが地元学』

『地元学からの出発』（2009年）

「ないものねだり」から「あるもの探し」へ

遠くで光り輝くものも悪くはあるまいが、今はむしろ、ここにあるものを見つめ直してみたい。この土地を生きてきた先人たちは、限られた自然立地条件の中で、どのようにして己が生きる場と暮らしをよくしようと努力してきたのか。その知恵と工夫は？

いたずらに格差を嘆き、都市とくらべて「ないものねだり」の愚痴をこぼすより、この土地を楽しく生きるための「あるもの探し」。

さらに農政官僚から民俗学者へ転じた柳田國男の文を引用しながら、結城登美雄は「よ

い地域であるための7つの条件」を、各地の人々からの聞き取りをもとに、次の様に整理した。これは参加型の地域づくりにあたっての重要な視点を示しているといえる。

よい地域であるための7つの条件

- 1 よい仕事をつくること
- 2 よい居住環境を整えること
- 3 よい文化をつくり共有すること
- 4 よい学びをつくること
- 5 よい仲間がいること
- 6 よい自然と風土を大切にすること
- 7 よい行政があること

(参考)

「美しい村などはじめからあったわけではない。美しく生きようとする村人がいて、村は美しくなったのである」

柳田國男『都市と農村』（1929年）

6 集落点検ワークショップ

こうした地元学を具体的に実践していくためにはどのような方法があるだろうか。今回の調査では、(独)農村工学研究所が体系化した集落点検ワークショップと地域活性化ワークショップを連続的に行うことで、参加型地域づくりを進めていくこととした。手順は次に図示した通りである。

・ ・ ・ 集落点検ワークショップ ・ ・ ・

「集落点検ワークショップ」

◆「ワークショップ」とは・・

もともとは演劇用語で、色々な人が意見を出し合ってお芝居をつくっていくときに用いた言葉でした。いまではある課題について多くの方々の意見を持ち寄って、話し合いながら新しい方向を考えて行くという作業のことです。

◆「集落点検ワークショップ」とは・・

地域の皆さんと地域外の学生とが一緒になって、地域を見て回り、地域の良いところ、自慢できるところ・お宝や問題点を発見していく作業です。

地域を見ていく視点としては、例えば次の様なことが挙げられます。

⇒地域の資源、産業、暮らし、景観、伝統、文化、施設、公園などで気のつくことは何か

教育、通学、福祉、交通、道路、土地利用、農業、工業、商業、観光
除染、風評被害等の課題（歩きながら気がついたことを書いていきましょう）

◆皆さんで地区を歩いてみましょう。

①その中で地区の良いところや問題点を発見してみましょう。

②発見してきた事実を大きな地図の上に書き込んでいきましょう。写真があれば貼っていきましょう。

③そこから読み取れることを皆で考えて、提案できることは何かを考えていきましょう。

その良いところ、自慢できるところ、問題点、改善方法について考えていきましょう。

7 地域活性化ワークショップ

集落点検ワークショップをふまえて、地域の課題を発見し、解決していくために、地域活性化ワークショップを行った。その手順は図示した通りである。

・ ・ ・ 地域活性化ワークショップ ・ ・ ・

1 集落点検ワークショップから覚えてきたことの復習

2 地域活性化ワークショップを実際にやってみましょう

ワークショップの手法であるKJ法の説明

具体的に皆で意見やアイデアを出しあってみましょう

それをカードに書いていきましょう

カードに書いた意見を紙に貼りだして、項目分類をしながら貼っていきましょう

貼ったカードやそのグループごとの相互の関連を考えていきましょう

3 そこで出た課題を具体的に、誰が、どの様にして、いつ頃までにそれを解決し、新しい方向に向かって動いていくか話し合い、書き込んでいきましょう

例えば（参考キーワード）

地域の資源、産業、暮らし、景観、伝統、文化、施設、公園

教育、通学、福祉、交通、道路、土地利用

農業、工業、商業、観光

除染、風評被害 など

4 全体を関連づけて考えていきましょう

そこから提案できること、むらづくりを生かせることは何か考えていきましょう

これらをふまえて、このあとⅡ、Ⅲで地域ごとに整理したように、各地区で住民、行政、学生が一緒になって、ワークショップを行い、地域の抱える課題の点検、解決の方向を探っていくこととした。

調査で行ったことならびにその中から明らかになったことをはじめに全体的に図示すると次のようになる。ポイント次の5点である。第1は集落の現状、第2は具体的な活動内容、第3は活動で見つけた集落の魅力、第4は活動で見つけた集落の問題点、第5は集落活性化策、今後の活動の抱負である。

宇都宮大学 守友ゼミナール/新宿・道少田・広畑地区(鮫川村)

1 集落の現状

- 地域の特色(セールスポイント)
手まめ館を中心とした小さな経済
- 現状・課題等
高齢化・若者不足



館山から見た鮫川村

2 具体的な活動内容

- 集落点検・活性化ワークショップ
(集落での交通手段・営農状況及び集落活性化に対する住民の意識調査)
- お宝マップづくり、課題発見・対策会議



手まめ館での食事

3 活動で見つけた集落の魅力

- 豆たっプロジェクトに代表されるような、住民と行政の繋がりの強さ
- 住民の憩いの場が整備されつつある(館山公園など)



館山での点検ワークショップ

4 活動で見つけた集落の問題点

- 高齢者に対する買い物や交通面での不便
- 若者の就職先が少なく、定住しにくい



住民とのマップ作り

5 集落活性化策、今後の活動の抱負について

- 空き家を活用した外部の人間の呼び込み
- 村内の人と人との強固なつながり
- 村内における若者の働く場の創造

(注) 豆たっプロジェクトとは、鮫川村で行われている「まめで達人なむらづくり事業」をさしている。

以下対象地区ごとに説明をしていくが、対象地区が新宿、道少田、広畑と分かれており、調査参加人数の関係もあり、鮫川村の中心に位置する館山周辺(鮫川村中心部北部)と広畑(鮫川村中心部南部)とにわかれて調査、ワークショップを行った。

以下具体的にワークショップの概要、結果について述べていく。

II 館山周辺（鮫川村中心部北部）

1 集落点検ワークショップ

・集落点検マップ全体図



図1 完成した集落点検マップ

付箋の色 黄緑が住民からの意見 黄色が行政からの意見 青色が学生からの意見

(1) 地域をイメージするタイトルに関して

地域をイメージするタイトルとして北側のグループと南側のグループ、それぞれで考案した。北側の地域をイメージするタイトルは館山を中心とした環境整備による将来像、そして地域の方の意見を取り入れて「花と夢咲く館山」と付けた。

(2) 地域点検マップを作成する際に辿った経路について

役場 → 館山 → 手まめ館 → 商店街 → 役場

(3) 歩きながら発見したこと

地域点検ワークショップで出た代表的な意見や問題点をまとめた。

・館山に対する意見

- ・自然が豊か
- ・景観がいい
- ・住民の健康促進への貢献が期待できる。
- ・綺麗に管理されている

提案 → 登山道の整備（手まめ館側）



・オオムラサキに対する意見

- ・オオムラサキが居るなんて凄い。

提案 → より大々的にPRしては？



・ 鮫川に対する意見

- ・ 水質検査をこまめに行い、水質管理が行き届いていて、とてもきれい。
- ・ カジカやヤマメなど、水が綺麗でないと住まない魚が住んでいる。

提案 → 洪水防止のための掃除



・ 空き家に対する意見

- ・ お店がつぶれて、商店街が空き家だらけに

提案 → 空き家を利用して、住民が集い憩いの施設するのはどうか
→ たとえば和紙や絵手紙のギャラリーや憩い喫茶。併用施設でもよいのでは。

・ 人

- ・ 村の生徒のあいさつが活発
- ・ 住民たちが村の先人、年寄りを尊敬している
- ・ 若い人たちが少ない



・ 道路

- ・ 道にゴミが少ない
- ・ 道路の脇の花がきれい
(手入れは自主性)



・ 獣害

- ・ イノシシの被害
- ・ サギに庭の鯉を食べられる
- ・ イノシシ、タヌキ、サギ対策に電防柵

・ 環境

- ・ 森づくり100年委員会による花見山計画
- ・ 頂上部を芝生広場にしたい
- ・ シルバー人材による草刈りボランティア

・ 生活

- ・ 図書館を直してほしい
- ・ 空き店舗、空き家が多い
- ・ 若者が楽しむ場所が少ない

・ イベント

- ・ 道端景観コンテスト
- ・ うまいもの市
- ・ 商工祭
- ・ 8/15 花火大会
- ・ 10/22 モトクロス大会

・ 観光客

- ・ 村外からサイクリングやツーリング
- ・ ホテルを見るツアー客が増えた（有機栽培農家が増えたため）



(4) 以上の意見から判ること、問題点に対する必要な解決策

地域活性化ワークショップで出た意見から、村内では活発にまちおこしを行っている印象を受ける。しかし、それが正しく外部に伝わり人を招く結果につながっているかと言うと、そうとは言い難いのが現状である。その原因として考えられるのは二つである。

一つめは人不足である。アイデアややりたいことはあるが、それを行う人がいないという問題点がある。これには外部からの人の誘致が必要になる。

二つめは伝達不足である。地域点検ワークショップを通し、鮫川村には外部の学生から見て他の場所にはない魅力がたくさんあることがわかった。また、それを支える住民や行政の存在なども他に負けないほどの魅力の一因である。ただ、そういった魅力を正しく外部にアピールできているのかと言われると疑問が残るとするのが正直な感想である。

一つめの原因も二つ目の原因も広報的問題が考えられる。たとえばホームページなどでアピールするだけでは、人を誘致するには至らない。なぜなら、ホームページとは自発的に見なければ情報が伝わらないからである。まず、外部の人間が鮫川村に興味をもつようになるインセンティブが必要と考えられる。すなわち、適材適所で村の魅力を外向的に発信していく必要がある。

たとえば、オオムラサキに関して昆虫雑誌に記事を載せてオオムラサキがいる事をアピールする。そうすれば適材適所に情報が伝達される可能性が増え、鮫川村に興味をもつインセンティブを創造する事につながる可能性は高くなる。まちおこしとして周囲の林木を使って木製のベンチやオブジェなどのアートな人材が欲しいのであれば、芸大や美術専攻系列の学校に求人募集を出す。実際に芸術大学や美術専攻で学んでも、それに関係のない職業に就いている学生は多くいる。それはクリエイティブな職業は安定性を欠くからであるが、村営でクリエイティブ集団を雇う事とすれば就業するという人間は招くことができるだろう。

つまり、まず必要なのが興味を持ってもらうために、自発的・外向的に情報を発信していく必要がある。そして興味を持つ人が現れた時に、それらの人たちに正しく・わかりやすく鮫川村の魅力を伝えるような体制が必要である。

2 地域活性化ワークショップ

(1) 地域活性化ワークショップ

資料全体図



(2) 全体図完成への経緯

集落点検ワークショップであげられた意見から、鮫川村に人を誘致する事を最終目標とし、それに対して必要となる項目をリストアップした。自然・空き家・景観・生活という各項目にある改善点を克服する事でより魅力あふれる村になる。

また、それに加えて集落点検ワークショップのまとめで提示した外交的な情報の発信のプロセスを加えることで、将来の鮫川村に人を招き入れる結果へとつながるという事を図示したのが今回の地域活性化ワークショップ資料の全体図の完成の経緯である。

各項目貼られている付箋は、地域活性化ワークショップの意見を踏まえて、それに対する解決策を学生と地域住民の方々と共に話し合っ出て意見である。

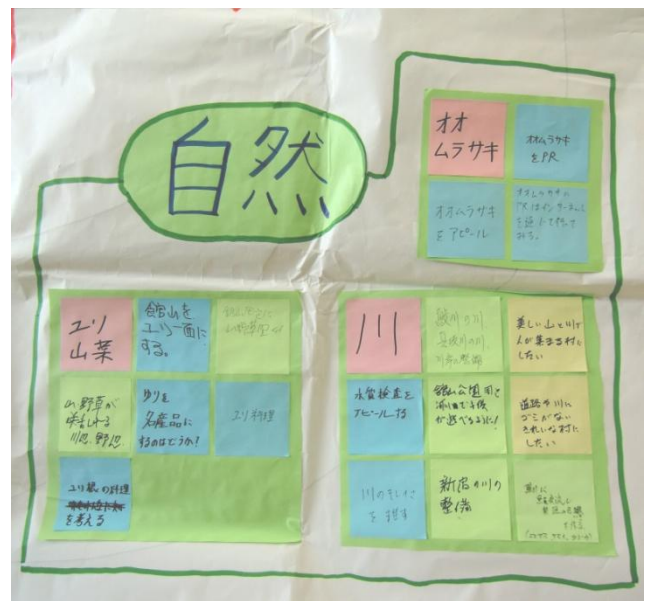
(3) 各項目に関する問題点・意見抜粋

・自然

自然環境の分野については館山をはじめとした活気のある事業、まだまだ活用されきれてない環境資源や観光資源が数多く挙げられました。これらを今後どのように工夫し、アピールしていくのか、活用していくのかが今後の大きな課題になると考えられる。また自然が豊かであるが故の獣害などの被害も問題点として挙げられている。また、人工的環境の側面では、空き家の増加による景観悪化の問題も挙げられている。

・空き家

空き家が多いので、とにかくそれらを有効活用しようという意見が多くみられる。具体的には空き家を再ペイントしてオブジェとするという意見や空き家に簡素な無人施設を作っ、誰でも利用できる



ように開けておくなどの意見が挙げられている。

・景観

館山やその周辺の環境的整備・管理などの意見が多く挙げられた。ことに館山に関しては、今後村の中心的シンボルとしての活躍も期待される鮫がわ牟田における重要なコンテンツなので、館山やその周辺の整備は重要な課題となってくる。

・生活

生活の面での問題点としては、インフラ整備の不十分や利便性の欠如等が挙げられる。お年寄りが中心となっている村では早急に解決すべき急務である。

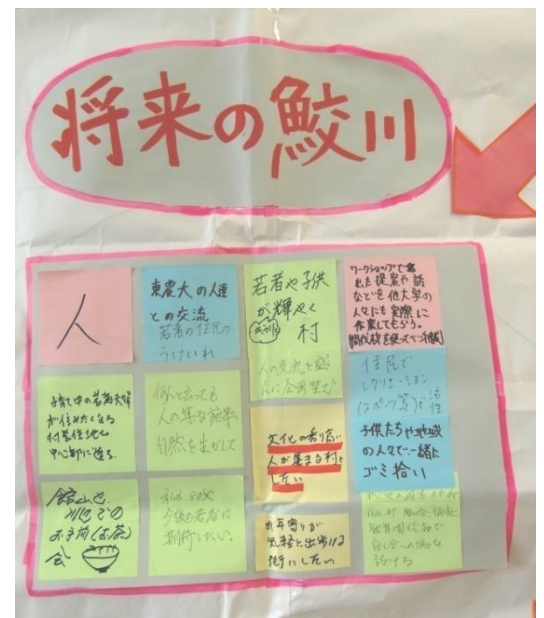
(4) 最終的解決策

- ・インターネットを通じた、環境資源のアピール
- ・展示ギャラリーなど、維持にコストのかからない空き家の活用
- ・伐採した木の活用。休憩所としてのベンチや景観のためのオブジェ等。
- ・館山を中心とした人為的観光資源。
- ・手まめ館を中心とした村内循環経済の構築、また副次的効果。
- ・空き家を資源とした積極的な人の誘致。

(5) まとめ

主にこのような意見が、活動を通してあげられた。この中でも、私たちは解決策提案の2番目に主に着目する。『維持にコストのかからない』という部分が重要である。一度作ってしまえば、維持にコストのかからないコンテンツ(内容)の作成が過疎地には必要ではないかと考えられる。

これには解決策の三番目も含まれる。例えばベンチやオブジェなどは一度作ってしまえば大きな維持コストは必要とせず、かつ十分長い期間機能する。館山のような大きなコンテンツは作成に大きなコストを必要とするが、こういった小さく維持コストのかからないコンテンツに対して、今後目を向けていくのはいかがだろうか。以上を一つの提言として提出しておきたい。



Ⅲ 広畑（鮫川村中心部南部）

1 集落点検ワークショップ

(1) 集落点検マップ

○ 全体図



☆付箋紙の色 水色・・・学生 緑・・・住民 黄色・・・行政

○ 商店街 拡大図



○ 広畑地区をイメージするタイトル

温泉施設があるほか、源泉が湧きでており各家庭に温泉が供給されている。また、緑豊かな景観も合わせ、のんびりと癒しの時間をもてるというイメージのもと、「湯ったり いやしの郷」というタイトルとした。

(2) 点検経路

役場→商店街→源泉→つるや→さぎり荘→手まめ館

(3) 歩きながら発見した課題

・空き家問題

空き家が点在している。また、所有者が不在のため、その空き家を処理できずにいる。

・交通問題

車がないと非常に交通の便が悪い。バスもあるが、子供の通学時に走る程度なので住民の足として機能していない。

・買い物問題

商店の数が少ないうえ、土日祝日は営業していないため、必要なものを必要な時に買うことができない。

・村営住宅民とのコミュニケーション

村営住宅が村の中心から離れているため、村民との交流が希薄である。

・景観問題

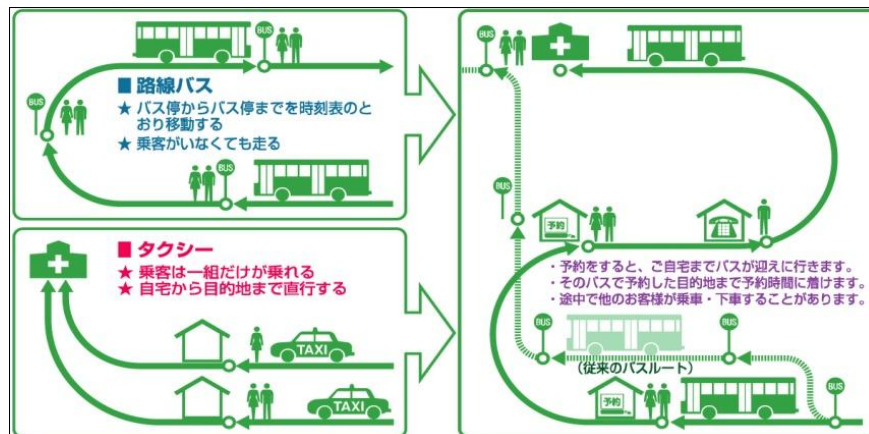
錆びた看板、枯れ木・枯れ草、廃墟など、さびれた印象を与えるものが多く散在している



(4) ここから読み取れること

空き家のスペースを利用したい。そのためにはまず、村外に出ている所有者と意思疎通を図り、権利をはっきりさせるべきである。その後は、住民の希望に合わせ使い道を考えればよい。例としては、新たな商店をつくる、宿泊施設にするなど。

交通問題では、デマンドバスの運用を提案する。予約をすることで、自宅までバスが迎えに来て、目的地まで直行するというシステムである。他の都市の事例ではあるが例示しておく。



交流問題については、村民・住宅民の両者が互いに歩み寄る姿勢を持つことが肝要である。さぎり荘などの公共施設で顔を合わせる機会もあるはずだ。

たしかに緑が豊かな景観ともいえるのだが、それ以上に汚れものが目立ってしまった。村の魅力をつくろうと新たに何か増やすのではなく、まず先に、さびれたものを撤去することで景観は格段に向上するはずである。

(5) まとめ

この点検ワークショップでは、学生の力を利用して村民の“意識”に働きかけることが目的である。何よりもまず、村民自身が村の現状に気付き、問題意識を携え興味関心を持てるかにかかっている。村民からすれば当たり前になっている状況を、客観的に見た私たちの意見を参考にしながら、共に策を練っていききたい。



2 地域活性化ワークショップ

(1) 地域活性化マップ

ひろはた
人が 老人から はじめる 楽しめる
たくさんいて、子どもまでが 笑顔で 地域

住民 学生 行政

メンバー
・藤田 洋人
・宇田 健一
・鈴木 三平
・高橋 大介
・土橋 龍
・戸倉 毅
・永井 雅之
・野口 拓平
・藤江 悠平
・千葉 泰史
・澤田 研太郎

村内 (で考えよう)

村外 (へ行って考えよう)

後継者問題 耕作放棄地

農業

特産品

村で地域地籍の PR 活用 (先住つら)

住民参加の特産品振興

自然

村で地域地籍の PR 活用 (先住つら)

川辺の整備

交流

つり大会のPR 清潔な化した カジカを観光PR

小さな集いの場 (定期集会)の充実

文化

長い果樹畑がたつた フォンテント 朝会の子供たちが向かい 自然学校

ギャラリーの活用

観光

空き家を賃貸して 貸し出し 学生向けプログラムの開催

ゴミ拾いなど村内の美化

商店

農土料理の継承

買物客向けの 代行サービス 土日祝日の営業

商店にも特産品を 並べる

村内での雇用創出 住民主体の地域づくり

交通

村内の若年者向けの 交流 サービスが充実

名産品をPRして 若者向け村営住宅の拡充

村内の若年者向けの 交流 サービスが充実

山内町の教育施設充実

子育て

地域

地域

この図全体のイメージとして次の様に名付けた（図の左上の標語）。

- ひ・・・人がたくさんいて
- ろ・・・老人から子どもまでが
- は・・・はじける笑顔で
- た・・・楽しめる地域

（2）このようにまとめた経緯

様々なカテゴリー（範疇）の意見が出たため、まずそれらを分類することから始めた。その後は、各意見の内容によって「村内において考えられること」「村外へ向けて考えられること」のふたつに大きく大分し、それぞれの内容をまとめたものを添えた。

ここで我々が意図する語義。以下、使用例。

- ・村内において → 住民の希望や、不満に感じている事への対処。
- ・村外へ向けて → 外部から人を呼び込むにはどうすればよいか。

上記のカテゴリーとは別に、全体的な問題を下部にまとめた。

（2）分類ごとの整理

◆農業

村内 → ・後継ぎ問題・耕作放棄地

村外 → ・農業と景観を結び付けたビジネスができないか

◆特産品

村内 → ・住民参加の特産品振興

村外 → ・村で地酒、地鶏を商品化し、宣伝する

◆自然

村内 → ・川辺の整理・バランスのとれた植採

村外 → ・釣り大会、清流、カジカなどを売りにできないか

・景観を活かしたフォトコンテストの開催

・都会の子供たち向けの自然学校

◆交流

村内 → ・ふれあいの場（定期集会）の充実

村外 → ・空き家を低賃金で貸し出す

・学生向けのフォーラムの開催

◆文化

村内 → ・ギャラリーの有効活用

村外 → ・郷土料理の継承

◆観光

村内 → ・村内美化活動（ゴミ拾いなど）

村外 → ・手まめ館～さぎり荘をつなぐ遊歩道の設立

◆商店

村内 → ・買い物弱者向けの代行サービス・土日祝日の営業

村外 → ・商店でも特産品を販売する

◇仕事

・村内での雇用の創造・住民参加の地域づくり

◇交通

・車のない高齢者向けの交通サービスが必要

◇過疎

・若者が少ない・若者向けの村営住宅の拡充

◇子供

・他の地域のこどもたちとの交流・姉妹校の提携

◇地震、風評被害

・山の幸、川の幸の放射能汚染

(3) まとめ

鮫川村のもっとも大きな課題は、過疎化・高齢化が進んでいる事である。この問題を打開するには、行政、住民、そして村外の人々の手が必要不可欠だ。

また、このワークショップを通じて感じたのだが、既存の村の魅力にもっと目を向けるべきである。素晴らしい特産品や豊かな景観があるのに伝わりきれていないのだ。

仮に、特産品を利用した新たなビジネスが起これば軌道に乗るとすると、村おこし的一端を担い活気づく。興味を持った若者が仕事を求めてやってくるかもしれない。というように、この村の課題を改善しうる利益が生まれる可能性も見えてくる。

景観についても言える。今ある緑をさらに良く見せるためにはどのような策が有効だろう。同じようにお金をかけるにしても、新たに事業を始めるのではなく

て、さびれたものを撤去して綺麗なものをより綺麗に見せてほしい。

改善しようと懸命になると“足し算”をしてしまいがちだが、そうではなく一度“引き算”の発想で構えてみていただきたい。ムダをなくせばムラが省かれ、ムリなく事は進んでいくのである。

Ⅳ おわりに

本事業は福島県企画調整部地域振興課が主催する大学生の力を活用した集落復興支援調査事業として行ったものである。受入は鮫川村新宿、道少田、広畑地区である。

2012年10月14日に集落点検ワークショップ、11月17日に地域活性化ワークショップを行った。

また12月22日に福島県知事表敬訪問（村上晴紀が出席）、23日には「大学生と集落住民による地域活性化への挑戦」というテーマのもと開催された「地域づくりオープンカフェ」（福島市）にゼミ3年生が参加して、他大学生、県内各地の調査集落住民の前でワークショップの結果の発表を行った。

さらに2013年3月10日には鮫川村公民館で村民に向けて、「集落点検・地域活性化ワークショップ報告会」を行い、村民の前で発表を行った。

守友ゼミナールが当事業に参加するのは2010～11年度の只見町布沢区に続き3回目となる。

事業の目的は集落活性化、復興支援である。それと同時に学生の教育という点で大変効果があると思っている。その効果を私は二重のスパイラル的（螺旋状の）発展と名付けているのであるが、これは何も知らない学生たちが集落点検ワークショップなどで地域の方々から教えていただき、逆に地域の方々からすれば、「学生さん、そんなことも知らないの」ということを「発見」し、そこで自分の持つ暮らしの技や地域の良さを再認識することになる。そうして地域の良さを把握して、一段レベルの上った地域の方々のお話から、学生たちはまた学んでいけるのである。学生が学ぶと地域の方々の、地域や自分を認識するレベルが上がり、地域の方々のレベルが上がると、学生の学ぶレベルが質的に向上するという、相互によい影響を与えながらスパイラル的に互いに認識のレベルアップを図ることができる。地域の発見、発展と学生の成長とが表裏一体のものとして実現していく可能性を秘めているのである。

こうして地域の側の地域活性化と、大学の側としての学生の成長とが同時に実現できることから本事業にゼミとして取り組んだ次第である。

ただ報告書そのものは学生たちが議論して、その後分担して取りまとめたものであり、コンサルタントなどが作るような立派な報告書とはなっていない。しかしその中に地域に学び、成長した学生たちの姿を見いだして頂ければ幸いである。

本事業を企画立案した福島県地域振興課と鮫川村役場、さらには受け入れ地区である、新宿、道少田、広畑の皆様にあつくお礼を申しあげる。

宇都宮大学 守友ゼミナール/新宿・道少田・広畑地区(鮫川村)

1 集落の現状

- 地域の特色(セールスポイント)
手まめ館を中心とした小さな経済
- 現状・課題等
高齢化・若者不足



館山から見た鮫川村

2 具体的な活動内容

- 集落点検・活性化ワークショップ
(集落での交通手段・営農状況及び集落活性化に対する住民の意識調査)
- お宝マップづくり、課題発見・対策会議



手まめ館での食事

3 活動で見つけた集落の魅力

- 豆たっプロジェクトに代表されるような、住民と行政の繋がりの強さ
- 住民の憩いの場が整備されつつある(館山公園など)



館山での点検ワークショップ

4 活動で見つけた集落の問題点

- 高齢者に対する買い物や交通面での不便
- 若者の就職先が少なく、定住しにくい



住民とのマップ作り

5 集落活性化策、今後の活動の抱負について

- 空き家を活用した外部の人間の呼び込み
- 村内の人と人との強固なつながり
- 村内における若者の働く場の創造

鮫川村のみなさん こんにちは

私たちは宇都宮大学農学部農業経済学科の学生と教員です。



現在福島県では「大学生の力を活用した集落活性化」事業を行っています。これは大学生などの若者との交流による集落の活性化を目指そうという考えで行われているものです。今年には鮫川村の「**新宿・道少田・広畑地区**」においてこの事業を行うことが村と県と大学との話し合いにおいて決まりました。

今回は「**集落点検ワークショップ**」というやり方で地域の皆さんと一緒に、地区や村の将来について考えていきます。10月と11月の2回ワークショップを行いたいと考えています。



第1回目は**10月14日(日)**に行います。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

9時30分に役場に集合し、説明を聞いてから開始。10時~12時の間、集落の皆さんと学生と一緒に集落の中をまわり、地区の「お宝」探しを行います。

お昼休みの後、13時~15時くらいで調べてきたこと、発見したことをまとめていきます。

難しいことはありませんので、気楽に参加して、大学生と意見交換していただければ幸いです。

◆まず「ワークショップ」とは・・・

もともとは演劇用語で、色々な人が意見を出し合ってお芝居をつくっていくときに用いた言葉でした。いまではある課題について多くの方々の意見を持ち寄って、話し合いながら新しい方向を考えて行くという作業のことです。

◆その中で「集落点検ワークショップ」とは・・・

地域の皆さんと地域外の学生とが一緒になって、地域を見て回り、地域の良いところ、自慢できるところ・お宝や問題点を発見していく作業です。

地域を見ていく視点としては、例えば次の様なことが挙げられます。

地域の資源、産業、暮らし、景観、伝統、文化、施設、公園などで気をつくこと何でも
教育、通学、福祉、交通、道路、土地利用
農業、工業、商業、観光・・・お店、学校、手まめ館、買い物、病院は？
除染、風評被害等の課題・・・これら以外にも歩きながら気がついたことを書いてい
きましょう。

その良いところ、自慢できるところ、問題点、改善方法について考えていきましょう。



◎作業の手順

①皆さんで地区を歩いてみましょう。

その中で地区の良いところや問題点を発見してみましょう。「お宝」発見の気分で歩いてみましょう。



②発見してきた事実を大きな地図の上書き込んでいきましょう。写真があれば貼っていきましょう。



③そこから読み取れることを皆で考えて、提案できることは何かを考えていきましょう。

次回、11月17～18日に今回の結果を踏まえて地域活性化ワークショップを行う予定です。
地域の良いところ、自慢できるところをふまえて、問題点をどう改善していくか、それを誰と誰が、どう力を合わせて行っていくか、地区でやること、役場と協力してやること、広域的にやることなどを考えていく予定です。
そちらへも是非ご参加下さい！

連絡先

鮫川村役場企画調整課 電話0247-49-3115

宇都宮大学農学部農業経済学科 守友研究室 電話028-649-5523

鮫川村の皆さん、秋も深まって来ておりますが、 お元気でお過ごしでしょうか。

私たちは宇都宮大学・農学部・農業経済学科の学生、院生、教員です。

10月に「新宿・道少田・広畑地区」の集落点検ワークショップで大変お世話になりました。

引き続き、**11月17日（土曜日）午後1時30分から、役場（2階・正庁）で 地域活性化ワークショップを行いますので、皆さんぜひ参加してください。**前回のワークショップに参加しなかった方も大丈夫です。新宿・道少田・広畑地区以外の方でも参加できます。みんなでワイワイ楽しくやりましょう。

今回行う作業（ワークショップ）の大体の流れは次のようになります。

- 1 前回の集落点検(背面写真①参照) **ワークショップの簡単なまとめ**（中間報告）



（背面図①参照）

- 2 地域活性化ワークショップを実際にやってみましょう

➡ ワorkshopの手法である**KJ法**の説明

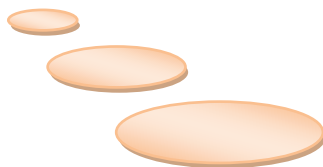
➡ 具体的に皆でこうあってほしいという、鮫川村への希望、夢、意見を出しあってみましょう。それを一つ一つカードに書いていきましょう（背面写真②参照）

➡ カードに書いた意見を紙に貼りだして、項目分類をしながら貼っていきましょう

➡ 貼ったカードやそのグループごとの相互の関連を考えていきましょう



- 3 そこで出た希望や夢を**具体的に、誰が、どの様にして、その実現に向けて、動いていくか**話し合い、書き込んでいきましょう（背面写真③参照）



カードに書いていくときの参考となる項目

地域の資源、産業、暮らし、景観、伝統、文化、施設、公園、
教育、通学、医療、福祉、交通、道路、土地利用、農業、工業、
商業、観光、除染、風評被害 などの課題に加えて、こうあって欲しいという希望や夢について書いていきましょう

写真①



←図①

↓写真②



←写真③



新宿・道少田・広畑地区

集落点検・地域活性化 ワークショップ報告会



今年度、県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の採択を受け、宇都宮大学農学部守友裕一教授とゼミの学生たちが、新宿・道少田・広畑地区を活性化するためにはどうすればよいか。その方策を探すために住民と一緒に集落点検ワークショップや地域活性化ワークショップを行い、検討してきました。

このたび、その結果がまとまりましたので、報告会を開催します。

どなたでも参加できますので、お誘い合わせのうえぜひ参加してください。

【内容】

- 1 ワークショップによる地域調査の意義…守友裕一教授
- 2 集落点検ワークショップと地域活性化ワークショップの結果報告…宇都宮大学学生
- 3 質疑と全体討論「鮫川村のこれからを考える」

日 時 平成25年 **3月10日(日)**
午後1時30分～午後3時

場 所 鮫川村公民館

主催：鮫川村 共催：赤坂中野区、赤坂東野・石井草区
協力：宇都宮大学農学部守友ゼミ

問い合わせ：役場企画調整課 TEL49-3115